# クン・サンの「きついジョーク」は いつ・どこで語られたのか

丹　野　　正

**要旨：**

一般に狩猟採集民の社会は徹底した平等主義社会であると位置づけられている。リー（1979）が記載したクン・サンのハンターたちが交わす「きついジョーク」は、このことを端的に示す事例として多くの人類学者たちが紹介している。また、リーが調査地のクンたちへのクリスマス・プレゼントとして購入してきた大きな雄牛が、彼らによって酷評されてしまったというエピソードも、同様の例として引用される。私はムブティやアカのハンターたちが仲間の殺した獲物をけなす「きついジョーク」を聞いたことがなかった。そこで、クンはなぜそのようなジョークをあえて言うのかという疑問をもった。また、リーはハンターたち自身による「きついジョーク」と雄牛のエピソードのどちらを先に経験したのだろうか。

本稿では、リー自身は雄牛の一件をどのように受けとめ、そこから何を理解するに至ったのか、さらに、ハンターたち自身が交わすとされる「きついジョーク」は実際にはいつ、どこで、どのような状況のもとでリーが知ることができたことなのかを、リーの叙述をもとに明らかにする。これらのことは、彼の著書の以下のような目的に直接に関わっているからである。「・・・また調査者たちがクンの生活に、そしてクンたちが調査者たちの生活に及ぼした相互のインパクトを跡づける。その目的はフィールドワークの経験なるものを（読者に）お伝えすることにある。」

**キーワード：**狩猟採集民、クン・サンのきついジョーク、平等社会、フィールドワークの経験

# When and where did the !Kung San hunters talk the “severe joke” ?

Tadashi TANNO

**ABSTRACT：**

It is pointed out that the hunter-gatherers’ society is thorough Egalitarian Society in general. As an example that shows this fact clearly, many anthropologists refers to the “severe joke” which is talked among the !Kung San hunters researched by Lee（1979）. And they also refers to the episode about Lee’s Christmas present of a large and meaty ox to the !Kung. The giant ox he had chosen became the subject of ridicule and derision, not happiness and gratitude. Among the Mbuti and Aka I had not heard such a severe joke made about a fellow’s kill. Then, I wondered why the !Kung dare to talk the “severe joke” with each other. Further, which did Lee experience before, the severe joke among themselves or the episode about the ox?

In this paper I make clear what Lee learned and understood from the affair of the ox, and when, where and in what situation he could actually hear the “severe joke”, being based upon his description. Because these are directly concerned in the goal of his book as follows, “・・・ and traces the mutual impact of researchers on the lives of the !Kung and of the !Kung on the lives of the researchers. The goal is to convey the experience of fieldwork.”（Lee,1979,pp. 8 - 9 ）

**Key word：**Hunter-gatherers, !Kun San’s Severe Joke, Egalitarian Society, Experience of Fieldwork

## 狩猟の獲物についてのクン・サンの「きついジョーク」

狩猟採集民の社会は一般に徹底した平等主義社会であり、とくに狩猟による獲物の肉の分配はこのことを端的に示す行為と規範であると位置づけられている。なかでも、リーが1960年代に調査したアフリカ南部のクン・サンの事例は、多くの研究者によって引用され紹介されている。以下はその１例である。

威信の集中化を防ぐ第二の要点は、ハンターや獲物の所有者に厳しい節度が要求されることである。体重数百キログラムもある大型獣を倒したときでさえ、あるいはむしろそのような場合にこそ、ハンターは得意そうにガッツポーズをとったりせずに控え目に振舞うことが要求される。獲物を射止めてキャンプに帰ったハンターは誰かに尋ねられるまで黙って座っている。人々は、こうした普段よりもかえって控え目な態度から彼が大きな獲物を倒したことを察するのである。彼らの社会では、傲慢な者や得意になったりする者は徹底的に拒否される。人類学者とてその例外ではない。サンの調査を行なったリー（Lee,1969 b）は調査が終わりに近づいた頃、クリスマスに大きな牛をプレゼントしてサンに喜んでもらおうとした。しかしその牛が近くの牧場で一番大きなものだったと自慢したばかりに、サンからは実に冷淡な反応しか得られなかったと述べている。

一方、分配を受ける側も盛んに獲物の価値をおとしめるようなことを言う。サンのハンターが獲物を射るとその日はいったんキャンプに帰り、翌日あらためて数人の男とともに獲物の追跡と回収に向かう。同行した男たちは、獲物をみつけると、露骨にそれを仕止めたハンターに失望を告げる。「こんな骨の塊を持って帰るためにわれわれは引っ張り出されたわけ？」とか、「家に居れば腹は減っているかもしれないが、少なくとも冷たい水が飲めたのに」などと嫌みをいう。これに対してハンターは、「たしかにそのとおりだ。こんなものはとりに来るほどのものではない。肝だけ焼いて食って、あとはハイエナにでもくれてやろう」などと言ったりするのである（Lee,1979：246）。もちろんこれはきついジョークであり、彼らが実際に貴重な獲物を捨ててゆくはずはない。分配を受ける側が獲物の貧弱なことをなじり、与える側はひたすら恐縮してそれを詫びる。このような立場の逆転したやりとりには、分配がいかに威信と結びつきやすいものであり、それに対してサンがいかに気を使っているかがよく表れている。　　（市川,1991：26-27ページ）

この文章中で市川は、クン・サンの「きついジョーク」の事例とともに、リーがクンたちへクリスマスにプレゼントした雄牛をめぐるエピソードを紹介している。私は雄牛のエピソードについてはこの論文ではじめて知ったのだが、そのときはこの部分にさほど気をとめなかった。

## 「きついジョーク」と「雄牛事件」の関連性

寺嶋も一昨年クン・サンの「きついジョーク」について論じており（寺嶋,2004、P25）、その部分の内容は上掲の市川の文章とほぼ同様である。ただし寺嶋は雄牛の一件をかなり詳しく紹介している。以下にその部分を引用する。

リチャード・リーは、やはり一九六〇年代の後半から、ボツワナ北部に住むクン・ブッシュマン（…略…）について精力的な調査を始めたが、その調査における自分自身に関わる興味深い体験談を披露し、彼らの平等主義が努力のたまものであることを強く主張した。それは次のようなものである。

一九六八年の暮れ、ドベ地区における一年余りにわたるフィールドワークを切り上げる際に、リーは、それまでの調査に協力してくれたクンたちへのお礼にと、牛を一頭屠殺してクリスマスを盛大に祝うという計画を立てた。宴会を盛り上げるためにリーはできるだけ大きな牛を買い求めてクンに披露した。しか

し、意に反してクンの反応は冷ややかであった。問題の牛は、「おいぼれ」「堅い」「痩せっぽち」などとひどい評価を受けた。リーが購入した巨大な雄牛は、幸福と感謝をもたらすかわりにクンの嘲笑の的となったのである。なんということか「焼き肉」（roast）が「ひどいあざけり」（roast）に変わってしまったのである（Lee 1979：23）。

リーはひどく落胆してクリスマスを迎えたが、宴会に供された牛は肉づきがよくてやわらく、宴会は大成功をおさめたのだ。このときリーはクンの独特のやり口に気がついた。クンの悪口や冷ややかな態度は、牛に対してというよりも、リーの独断性や冷淡さにたいしてだったというのである。また、牛自慢が大問題だったのである。「クンは激しい平等主義をもとめる人々であって、仲間たちの傲慢、吝嗇、冷淡などにがまんができない。彼らは同僚たちのそのような行為を見つけると、謙虚さをとりもどさせるための特別の工夫をおこなう」のである（ibid.：24）。（寺嶋,2004、24-25ページ）

寺嶋のこの紹介は、リーが「きついジョーク」について記述した1979年の著書そのものに基づいている。私は寺嶋の論文によってはじめて、リーが雄牛の一件についても本著に記述していることを知った。

## 「きついジョーク」への疑問

クン・サンのきついジョークに関して私は、漠然とながら気になっていたことがあった。それは、私が調査したアフリカ熱帯森林の狩猟採集民であるムブティやアカが、このようなきついジョークを交わす場面を見かけなかったことである。彼らがときおり試みる大型獣を対象とした槍猟には、危険だからという理由で同行することはできなかったが、日常的な網猟にはしばしば同行し、獲物の解体と分配の場面も見ていた。しかし、あるハンターの獲物を他のメンバーがけなすようなことはなかった。ただし、私は彼ら自身の言葉を現地で学習する余裕はなかったので、ムブティ調査では彼らも話す広域共通語のスワヒリ語を、アカ調査では同様のリンガラ語を用いた。だからもし彼らの間で同様のジョークが交わされても、私が聞きもらしていたという可能性はある。これまでに日本の多くの研究者が彼らを調査しているが、彼らもクンと同様にきついジョークを交わすのか否かについては、誰もまだ言及していないようである。ただし市川は、大型獣を槍で倒したムブティがキャンプにじつに謙虚な態度で戻り、ひかえめに振舞っていた一連の様子を叙述している（市川,1982、P93）。そして、ムブティもアカも獲物の肉をキャンプ内のどの家族にも分配することは多くの調査者が記述している。

以上のような理由で、上掲のようなジョークを交わすクン・サンは、ムブティやアカよりかなり「きつい」人たちだなという印象を私はもったのである。さらにいえば、クンが獲物の肉は分け合うべしという規範をもっており、現実にいつも分配し合っているにもかかわらず、なおかつ実際に上掲のような場面であのようなジョークを交わすのだとしたら、それは「きついジョーク」というよりはむしろ「いやみ」を言い合うようなものではないか、とも感じたのである。

私はクンの「きついジョーク」を直接リーの著書からではなく、他の研究者の論文等によって間接的に知ったのだった。しかし、上記の寺嶋論文によって「雄牛のエピソード」を知り、しかも彼は上掲の引用文中にあるように、「このときリーはクンの独特のやり口に気がついた。……」と紹介している。リーは長期間クン・サンの現地調査を行ったサン研究の第一人者である。「雄牛のエピソード」はその彼が調査を切りあげる際に起こったできごとであるという。

## 前後関係についての疑問

そこで次のような疑問が生じた。リーがクンの「きついジョーク」を、この雄牛のエピソードが起こる以前に見聞きしていたのか、それともこのエピソードの後で行った調査で知ったのか。もし前者だったとしたら、しかも彼らがなにゆえにこうしたジョークを交わすのかをも彼が理解していたとしたら、リーはなぜプレゼントの雄牛を自慢するというクンからみればおろかなことをしてしまったのか。もしうっかりしてつい自慢したのだとしても、彼はクンの一人が雄牛をけなす言葉を発したとたんにすぐ、自分のうかつさに気づいたはずである。他方、寺嶋が言うように「このときリーはクンの独特のやり口に気がついた」のであれば、リーはクンの「きついジョーク」を見聞きしていたのだが、彼らがなにゆえにこうしたジョークを交わすのかを、彼自身が雄牛の一件を経験したのちにようやく理解したことになる。

逆にもし後者だったとしたら、雄牛の一件が起こる以前の長い調査期間中、リーがクンの狩猟や獲物の解体・運搬行に同行したことがなかったとは思えないので、彼が同行したときには、クンたちがこうしたジョークを交わしたことはなかった、ということになる。しかし、「このときリーは……気がついた」というのであれば、雄牛の一件ののちに同行した際にリーが例のジョークをはじめて見聞きしたということはありえない。

では、あのジョークの会話をリーはいつ、どのような状況のもとで聞いたのであろうか。こうした疑問を解くために、私は一昨年はじめてリーの原著（Lee,1979）を読んだ次第である。以下では、本書からの引用はページ数のみを記す。

## 雄牛のクリスマス・プレゼント

リーは本書の第１章で雄牛の事件を記述し、この事件によって彼は深刻な影響を受け、それまでの調査における自らの振舞いを深く反省するに至ったと述べている。そしてこの事件を、彼のそれまでの調査研究それ自体を見つめ直す転換点となったできごととして位置づけている。

「第１章　Fieldwork with !Kung」のはじめの部分で、彼は次のように述べる。

> 以下の説明は1963年から73年までくり広げられたクンのフィールドワークの詳細であり、また調査者たちがクンの生活に、そしてクンたちが調査者たちの生活に及ぼした相互のインパクトを跡づける。その目的はフィールドワークの経験なるものをお伝えすることにある（Ｐ８）。

そしてまさにそのとおり、リーたちによる調査の経緯が９ページから28ページまで詳細に記されている。はじめに1963年と64年の調査の概要を述べたのち、ドベ地区で「1964年のクリスマスのために、われわれは雄牛を殺し、クンたちに３日３晩ごちそうした。これはその後の毎年の行事となるものの最初だった」（P15）と彼は記している。ただしこのときの記述はこれだけであり、大宴会となったこと以外はなにごとも起こらなかったようである。

1965年の元旦に調査地を去ったのち、彼は67年８月から再びドベ地区での調査を再開した（P16）。その年のクリスマスにも調査地に滞在していたリーは、「毎年の行事とな」った雄牛の肉のごちそうをこのときも行ったはずだが、大宴会となっただけだったのであろう。この年のクリスマスについては何も触れていない。

68年のはじめにリー夫妻はドベからカイカイ地区に調査キャンプを移し、「私たちはカイカイに14ヵ月滞在した」（P17）。17ページ以降ではそこでの調査のプロセスを説明し、そして、68年のクリスマスについて彼は次のように記している。「1968年の末までには、ハウエル（彼の妻）と私は

われわれの仕事を切りあげることについて考えはじめていた。この年のクリスマスは、カイカイでのわれわれの最後となるはずだった」(P23)。

この文章に続く雄牛の事件のリーの記述は、寺嶋が要約して上掲の引用文で紹介しているとおりである。つまり、これ以前にドベでむかえた2回のクリスマスは、雄牛の肉の宴会にクンたちが喜んだ以外になにごとも起こらず、3回目のカイカイでのクリスマスではじめて、リーはプレゼントの雄牛をけなされたのである。だからこそ彼は非常に驚き、ひどく落胆したのである。しかし、当日の宴会は一転して成功となった。これに続くリーの文章は、寺嶋による上掲の紹介と一部重複して長くなるが、重要な部分なので以下に引用する。

> では、彼らはまえもって私と私の雄牛のことをなぜあんなに非難していたのだろう。この疑問に対する答えの探求は、クンについてと私自身についての私の理解に関するまさにクリティカルな転換点となったのである。あとで知った（I later learned）のだが、私のことを彼らが非難したのは、雄牛についての私の判断のことではなく、この1年間の私の振舞いがお高くとまって勝手気ままだったことに対してだったのである。クンはすさまじく平等主義的な人びとであって、彼ら自身の間での横柄さ、けち、無関心さには寛容でないのである。仲間内にそんな振舞いの兆候を見ると、人びとと調和するよう引き戻すために、謙虚さを強いる一連の策を講じるのだ。
>
> ハンターの獲物をあざけるのはそうした平準化策略の一つなのである。そしてそれが、私はハンターではなく肉を買った人だったにもかかわらず、すごい手ぎわのよさときつい効果でもって私に用いられたのだった。この事件の全体が見透せるようになったとき、私は以下のことを実感するに至った。すなわち、私に対する彼らの感情のなかには、怒りと同時に愛情もあること；あの茶番劇は逆説的なことだが、私を除名するための方策ではなくて、むしろ彼らとより近いコンタクトの中に私を引き込むための方策だったこと。こうしたことを、私は調査地を去ってからずっとあとになって実感するに至ったのである。そしてこのことが、次の調査行はまったく異なる基盤に立ってなされなければならぬと確信させたのである。クンたちと有意義な個人対個人のつきあいをするためには、私の生活様式を質素にし、彼らのどまんなかに私が持ち込んでいた大量の物質文化を放棄することが根源的だったのだ。次の旅行は、ナップサックと寝袋だけで足で歩いてやろうと決心した。その機会はしかしながら4年後までやってこなかった。
>
> (PP.23-24)

リーがカイカイのクンたちとともにすごした1年間の彼の振舞いが、それ以前のドベでの調査中の振舞いより悪かったはずはない。彼は同様の態度で接していたはずなのに、ドベのクンたちはあえてリーの鼻をへし折ることをせずに対応していたのだろう。それに、ドベでの彼のキャンプには多くの研究者がやって来て、調査のために滞在し、大所帯になることがしばしばだったとリーは述べている。つまり、ドベのクンたちはリー（たち）に対して距離をおいた接し方をせざるをえなかったのだろう。他方その後のカイカイでは、リー夫妻は使用人1人を伴っただけで、ここのクンたちとはよりうちとけた付き合いをしていたはずである。だからこそリーはこの雄牛の一件に大きなショックを受け、だからこそクンたちはまたクンたちで、リーが気づかずにいる高い鼻をあえてへし折ってやろうという気になったのだと考えられる。

彼らは雄牛をひどくけなしたにもかかわらず、ドベでの2回のクリスマスのときと同様に彼らもまた当日の宴会を大喜びですごした。「では、彼らはまえもって私と私の雄牛のことをなぜあんなに非難したのだろう？」この疑問への答えを彼は「あとで知った（I later learned)」という。いつ、どのようにして知ったのか。

## いつ知ったのか

「この年のクリスマスは、カイカイでのわれわれの（滞在の）最後となるはずだった」、とリーは述べているが、そのまえに、ドベからカイカイにリー夫妻が調査地を移したのは「1968年のはじめ」であり、「私たちはカイカイに14ヵ月滞在した」（P17）と書いている。つまり69年の２月か３月までカイカイに居続けたのである。雄牛の一件が起こる以前は、彼らはクリスマスの宴会を機にカイカイでの調査を切りあげる予定でいたのだが、おそらくこのハプニングに関する疑問の答えを探求するために、滞在を延ばしたのであろう。なぜなら、すでに見たようにリーは答えがそのときすぐにはわからず、「あとで知った」のだから。しかも、この「あとで知った」ときでさえ、リーはまだこの事件の核心を実感するに至っていない。「この事件の全体像が見透せるようになったとき、私は以下のことを実感するに至った。…〔中略〕…こうしたことを、私は調査地を去ってからずっとあとになって実感するに至ったのである」、と彼は述べている。

リーは、上に引用した文章に続けて、４年後の1973年に単身で短期間ドベを再訪した際の、以前とはがらりと変った彼とクンたちとの交流の様子を描いて第１章の記述を終えている。

## どのようにして知ったのか

クンたちがリーと彼の雄牛をけなした理由を、彼は「あとで知った」と言う。だが、どのようにして知るに至ったのかについては直接に述べていない。また、クンたち自身の間での「きついジョーク」を、この雄牛事件より以前に見聞きしていたのか、その後に知ったのかについても直接には述べていない。仮りに前者だったと仮定してみよう。彼はクンたち自身があのジョークを交わすのを、獲物の解体・運搬行に同行した際にすでに見聞きしていた；しかも、それは彼らが眼前にしている獲物の実物を描写した表現ではなく、まさに「きついジョーク」としての表現なのだ、ということもすでに理解していたと仮定する。この場合には、その彼がその後に起こった雄牛の事件に彼があれほど驚きとまどったというのはいかにも不自然である。この第１のケースは成立しない。

とすると、次の２つの可能性のいずれかであることになる。第２は、彼はかつて同行した際に、現場で彼らがあのような会話を交わすのを見聞きしていたのだが、その会話の真の意味を、つまりそれは「きついジョーク」なのだということを、リーはのちのちまで知らないままですごしていたというケースである。しかし、このケースも不自然である。彼が会話の現場に一緒にいて、しかもその現場の実情を反映していない会話を見聞きしたのであれば、彼はその場で少なくとも疑問をいだくであろう。そしてその会話の真の意味を、直接彼らに質問するなりして探るはずである。その結果は上述の第１の仮定に至る。だからこのケースも否定される。

それゆえ、残る第３の可能性は、リーはあのジョークを、雄牛事件のあとで知ったというケースである。しかも彼は、雄牛事件のときのクンたちの言動も、彼ら自身の間で交わされたというあの会話も、ともに実はきついジョークなのだということを、同時に知ったのだと考えられる。つまり、彼は雄牛事件の以前には彼らの間でのあの会話なるものを見聞きしていなかった、換言すれば、クンたち自身はリーの眼前であの会話を交わしたことはなかったのである。私の結論を先取りして言えば、彼は雄牛事件の真相をその後クンたちと会話しながら探求するなかで、クンたちが自分たちの間でもこれこれこのような場合にはこんな「きついジョーク」をあえて言うこともあるのだよ、と例としてあげた仮想の会話だったのである。

彼はこうしたことを、クリスマス後に切りあげようとしていたカイカイ滞在を延長して雄牛事件の真相を探る過程で知ったのである。だから、「68年のはじめ」からの彼らのカイカイ滞在は、同年のクリスマス以後も含む「14ヵ月」に延びたのである。やはりクンたちもムブティやアカと同様

に彼らどうしではあのような「きついジョーク」はめったに口にしないのだ、というのが真相のようである。

## 「きついジョーク」の記述の前後の文脈

次に、リーは例のきついジョークを「第８章 狩猟」のなかでどのように記述しているか、その前後の文脈全体をとおして見てみよう。

彼は狩りの獲物の解体とキャンプへの運搬について219ページ以下に記述しており、およそ20キログラム以下の小さな獲物はハンター自身が担いでキャンプに持ち帰るという。つまり、このような場合にはキャンプに居る誰の目にもとまり、事情は一目瞭然となるわけである。

> 大きな獲物の場合は一晩放置され、手続きはもっと入念に行われる。第一に、獲物についてキャンプに告げる彼らの文化に特有のやり方がある。第二に、夜間ハンターが守るべきいくつかのタブーがある。第三に、運搬パーティーが組織されなければならない。朝、パーティーは足跡をたどり、可能ならばその獲物を見つけ、必要ならとどめを刺し、それから獲物を解体して、キャンプに運ぶためにいくつかの荷にまとめる。
>
> 狩猟の当日キャンプに戻ったハンターは、ひとりでに自然とうれしくなるが、彼はそれを表してはならない。獲物を倒したと告げることはクンには傲慢のしるしなのであって、強く妨げられる。控えめに言うことが適切な振舞いなのだ。(Lee 1969b、および以下を参照)。
>
> カイカイとその南の地域の優れたハンターであるカシェは、正しい振舞いを以下のように説明した。
>
>> 手ぶらでキャンプに戻ったときは、おまえは眠り、ひとりごとを言う。「あー、おれは何をしたんだ。獲物がなかったからといって何なんだ。」それから朝起きたらひとこともしゃべらずに出かけ、再び猟をする。こんどはおまえは何かを殺して、キャンプに戻る。私のtsu（年長の親族）が私を見て問う。「やー、今日は何に出会ったのかね。」「Tsutsu」と私は応える。「何も見なかったよ。」
>>
>> 私は頭をかかえてそこに座っているが、tsuはまた私のところに戻ってくる。なぜなら彼はzhu／twa（“person”、“人物”）だからだ。「何も殺さなかったって言うのはどういうことだ！ おれは腹へって死にそうなのがおまえには見えないのか！」
>>
>> 「あー、あそこには何かいるはずだよ。やつの肘を傷つけたはずだから。」
>>
>> すると彼はほほえみ、そこでおまえは言う。「どうして明朝いっしょに出かけてひと目見てみてはいけないのかな。」そしてわれわれとその他とで翌日いっしょにその肉を持ち帰ることになる。（pp.219-20）

このカシェの説明は、彼らとリーとの会話のなかでの、主としてリーに対する説明であったと考えられる。カシェはカイカイの住人であり、この会話はカイカイのキャンプでなされたのであろう。少し後に引用する別の会話にもカイカイのハンターたちが登場する。そこにはカシェの名前は出てこないが、それとこの会話はおそらく一連の脈略のものであろうと思われる。

以下の引用は解体・運搬行の際のクンの行動に関する記述の一部分であるが、それはリーの直接観察に基づいた叙述なのか否かは不明な書き方である。

> 通常の場合、一行のタイミングがよければ、肉食獣にまだやられていない死んだ獲物を到着して見つける。誰もが上機嫌になり、ハンターたちのほぼ全員が、一行の中の謙虚さを保つべきメンバーと調子を合わせながら、情ないほど小さな獲物や、それをキャンプに持ち帰るために求められたむだな骨折りについてからかい始める（このジョーキングは本章の後の方で、“Hunting Success and Status Differences”のと

ころで詳しく論じられる［リー自身の注］)。ジョーキングは彼らが獲物の解体にとりかかってからも続く。
(PP.221-222)

このあとは、獲物の解体作業についての一般的な説明が続く。そして、223ページの下から226ページにかけて、狩猟に出かける準備段階から最後に肉をキャンプに運び込むまでの一連のプロセスを、２回の事例について詳しく記述している。ただしジョークについての記述はなにもない。

ここで注目すべきは、第２事例の狩猟活動の日付けで、それは1969年３月12～14日である。やはりリーは調査を1968年末以降も延長していたのだ。ただし彼は1968年はじめから14ヵ月間カイカイに滞在したと述べていたが、この狩猟活動はカイカイ地区でではなく、ドベのキャンプを出発して３日後に戻るという行程で行われている。彼は２月末か３月はじめにカイカイを去って、ドベに戻っていたのであろう。

次に、リーがジョークについて詳しく論じると予告していた“Hunting Success and Status Differences”の節を見てみよう。243ページからのこの節のはじめに彼は、クンの男たちにこれまで各種の大型獣ごとに何頭獲ったかを聞き取った結果、非常に大きな個人差が存在することを記述したうえで、以下のように続ける。引用が非常に長くなるが、リー自身が一連の文脈として叙述しているので、この文脈全体を把握する必要があるからである。

クンの男たちは彼らの間のこのような差異の存在にどんな反応を示しているのか？ ヒエラルキーが形成されるのか？ 最良のハンターはキャンプの政治を支配し、女たちを独占するのか？ とんでもない（Far from it)。クンはすざましく平等主義的な人びとで、この平等性を維持するのに重要な一連の文化的な慣習を発達させている。第１は傲慢なやつや自慢するやつをやり込めることによって。そして第２は、こうすることで彼らの幸運が獲物に戻るようにしむけることによって。

男たちはできるかぎり狩りに行くよう励まされ、肉が持たらされたときは人びとは喜ぶ。しかし成功したハンターにとって正しい振舞いは、慎ましさと控えめさなのである。ガウゴという名のカイカイの男は、それを以下のように説明した。

ある男が狩りに行っていたとしよう。彼は帰って来てほら吹きのように「大物を殺したぞ！」と言ってはならない。まずは黙って坐っていなくてはならない。私や誰かが彼の焚き火のところにやって来て、「今日は何に出会ったんだ？」と聞かれるまではな。彼は静かに応える、「あー、私は猟運がない。何にも出会わなかったよ、…ちっぽけなやつ以外は。」そこで私はほくそえむ、なぜなら彼がなにか大物を殺したんだと今わかったから。

控えめであれというテーマには、翌日に解体と運搬のための一行が獲物を持ち帰るために出かけるときも続く。現場に着くと、一行のメンバーたちはハンターに対し落胆ぶりを大声で表明する。

「こんな骨ばっかりのやつをキャンプに持ち帰らせるために、われわれをこんな遠くまで引っぱって来たのかい。あー、獲物がこんなにやせてるとわかってたら、来なかったろうに。」

「みんな、こんな物のためにおれが木陰でのここちよい１日を棒に振ったなんて。キャンプではおれたちは腹をすかしてるかもしらんが、少なくともおいしい冷たい水は飲めるんだぜ。」

こうした侮辱に当のハンターは反抗してはならない。おだやかに、自己卑下した言葉で応えるべきなのだ。

「そのとおりだ。こいつは努力に値しない。力をつけるためにレバーを料理するだけで、あとはハイ

エナにくれてやろう。今日はまだ狩りをするのに遅くはない。ダイカーやスティーンボックでもこんなやつよりはましだろうから。」

もちろんパーティは獲物を捨てるつもりはない。きついジョークとあざけりはある目標をめざして、つまり成功したハンターの心に潜在する横柄な振舞いをおさえるために語られるのだ。クンたちは若者には傲慢になりがちな傾向があると認め、それと戦うための一定の手段を講じるのである。以下のようにカイカイの有名な呪医であるトマゾが語ったように。

若者が多くの獲物を殺すと、自分を首長やビッグマンだと思うようになる。そしてその他のわれわれを彼の召使いや目下の者のように思う。われわれはそんなことを認めない。自慢するやつはおことわりだ。いつか彼のプライドが誰かを殺すことになるからだ。だからわれわれはいつも彼の肉はなんの値うちもないと言うのだ。そうやって彼の心を冷やし、おとなしくさせるのだ。

たとえ何人かは他の男たちよりすぐれたハンターであっても、自ら膨脹する傾向を極小化し、彼らのエネルギーを社会的に有意義な活動に向かわせるために、彼らの振舞いは人びとによって型にはめられるのである。その結果、狩猟の腕前の違いがあっても、それは有能な少数の個人が威信に関して他より抜きん出るようなビッグマンのシステムには至らないのである。（PP.244-46）

## 判明する事実

以上のリーの叙述のうち、例のきついジョークのやりとりまでの部分は、前後の文脈から見て、ガウゴという名のカイカイの男がリーに語ってくれた説明を基にしての記述である。その一部は、ガウゴが彼らの間で交わされる会話という形を用いて説明した語りをそのまま採用し、他の部分はガウゴ（や他のメンバー）の説明からリーが理解した内容をリー自身が要約して記述するというスタイルをとっている。そしてあのきついジョークは、ガウゴの語りのなかでまさに説明するための一例としてリーに示したものである。

そしてこのジョークに続く部分は、おそらくガウゴの説明に同席していたトマゾというもう一人の男が、ガウゴの語りを受けついでリーに語ってくれたこととして記述されている。

つまり、ここでリーが叙述しているその内容は、彼が調査地カイカイに滞在している間に、カイカイのクンたちと会話し聞き取り調査を行っているなかで明らかになったことがらである。彼がこれらの聞き取り調査を行った時期は、これまでの検討結果から判断すれば、1968年のクリスマスの雄牛事件以前ではありえない。この事件以後の時期であり、年末にカイカイを切りあげようとしていた調査の予定を延長して、雄牛事件の背景と真相を探求するためにさらに１～２ヵ月カイカイに滞在し続けた時期に相当する。だからこそ、既述のように、彼は雄牛事件の真相も、それと密接に関連するクンたち自身の間の行動規範や違反者をこらしめる策略などを、「あとで知った」と記したのである。そして、それらの聞き取り調査によって得た情報からその全体像を把握するには、さらに時間が必要だった。だから、彼が理解しえたことがらを、「私は調査地を去ってからずっとあとになって実感するに至ったのである」（P24）とも吐露したのである。

1963年から68年のクリスマスまでの間に、リーは３回にわたって長期現地調査を行っており、彼はサンの社会の研究者としてはすでに第一人者であったといってよい。その彼が、68年のクリスマスにプレゼントした雄牛をめぐってクンたちから辛辣なジョークで非難され、強い衝撃を受けた。その時点では彼らの非難の理由や背景が彼には理解できなかっただけに、受けた衝撃はいっそう深刻だったのである。彼はその後、その真相を解明するためにクンたちとの会話を重ねる一方で、

「調査地を去ってからずっとあとになって」までも過去の経験を振り返って再考したのであろう。そしてすでに見たように、彼はそれまでの調査における自らの振舞いを深く反省するとともに、この事件を、それまでの調査研究そのものを見つめ直す「クリティカルな転換点となった」できごとだったと位置づけている。

## “平等社会”・“分かち合いの社会”

こうした転換点としての雄牛事件と、その後の見つめ直し作業を通じてリーが「実感するに至った」のが、「クンはすさまじく平等主義的な人びとなのだ」ということであった。彼は1979年の本書で、クン・サンの社会が徹底した平等社会（Egalitarian Society）であることを詳細に論じ、描きあげた。それは、換言すれば、「分かち合い」（Sharing）の社会である。

「分かち合う」・「共にする」ことは、「分け与える」ことではない。分け与えるとは、Aが自分の物（の一部）をBに与えることであり、この場合Aは当の物の所有者（owner）としてBに相対し、Bもこのことを認めたうえで受け取ることになる。われわれの社会では、ある物を入手獲得した人はその物の所有者であり、彼がそれを他者に与えるか否か、またそれを他者の別の物と交換するか否かを含めて、当の物をどう処理しようと所有者の自由である。クンの間でも、彼らが必要とする物はとうぜん誰かが入手し獲得してこなければならない。しかし彼らの間では、このような意味では、彼はその物の所有者ではない。彼はそれをキャンプの仲間に分け与えることすらできない。私があなたに与えるということは、私はもちろんあなたも周りの人も、それは私の物（所有物）だと認めたうえでのことになるからである。あなたは私から私の物をもらったのである。クンたちはこれを、こうした考え方を容認しない。私が調査したアカ・ピグミーも同様である（丹野、1991,2005）。

誰が獲得してきた物であれ、それはキャンプを共にする人びとの間で分かち合われ、共にしなければならないのである。それがキャンプを共にし暮らしを共にすること（to share）なのである。一つのキャンプの仲間はまさに生活共同体なのであり、キャンプを共にすることはこの共同体の一員として暮らしを共にすることを意味する。それがいやなら、あるいはいやになったら、彼・彼女とその家族はこのキャンプを去るしかないし、去ればよい。ただし１家族だけで生活することは不可能だから、結局は別のキャンプに合流せざるを得ず、そこの人びとと暮らしを共にすることになる。彼らにとっては、物の所有（ownership）を前提にした別の暮らし方という選択肢はない（なかった）のである。

リーのこの著書以降、多くの狩猟採集民調査研究者たちによって「狩猟採集社会＝平等主義社会」論が展開され、現在に至っている。その意味では、本書はこうした大潮流の源の一つとして、大きな刺激と影響を与えた研究だったと位置づけられよう。ただし、私は最近まで本書を読まずに、むしろその後のウッドバーンの論文（Woodburn,1982,1988）などを通じて「平等主義社会論」に接していた。そしてその論調に違和感を抱いていた。その理由については別稿（丹野、1991）で述べたので繰り返さないが、端的に言えば、それは上述のような私の実感に合わなかったからである。そしてそれは、今回リーの本書を読んで私が理解しえた彼自身の「実感」にも合わない論調である。だから私は「平等主義」や「平等社会」という言葉を用いず、むしろ「分かち合い」・“Sharing”の社会と呼んできた（丹野、2005）。リーはクンの社会を「平等主義の社会」と呼んでいるものの、本稿でこれまで見てきたように、そして本書のこれより後の章でも、彼はクン社会が「分かち合いの社会」であることを詳細に論じている。

私が本稿で確かめようとしたことは、彼がこうした彼自身の「平等主義社会論」に至る基礎と背

景となった彼のフィールドワークの体験の方だった。しかも彼は、それを読者が跡づけ、読み取ることができるように本書を書いていた。本稿の40ページに引用した文章中に、彼が本書を書こうとした目的が述べられている。その一部を再掲する。

‥‥また調査者たちがクンの生活に、そしてクンたちが調査者たちの生活に及ぼした相互のインパクトを跡づける。その目的はフィールドワークの経験なるものをお伝えすることにある（P８）。

## 文献


市川光雄、1982、『森の狩猟民―ムブティ・ピグミーの生活―』、人文書院.

市川光雄、1991、「平等主義の進化史的考察」、田中二郎・掛谷誠（編）『ヒトの自然誌』、平凡社、pp.11-34.

Lee,R.B.,1979, *The !Kung San： Men, Women and Work in a Foraging Society.* Cambridge University Press, Cambridge.

丹野 正、1991、「『分かち合い』としての『分配』―アカ・ピグミー社会の基本的性格―」、田中二郎・掛谷誠（編）『ヒトの自然誌』、平凡社、pp.35-57.

丹野 正、2005、「シェアリング、贈与、交換―共同体、親交関係、社会」、『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第１号、pp.63-80.

寺島秀明、2004、「ヒトはなぜ、平等にこだわるのか―平等・不平等の人類学的研究―」、寺島秀明（編）『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版、pp. 3 -52.

Woodburn,J. 1982, Egalitarian Societies. *Man*（N.S.） 1（3）.pp.431-451.

Woodburn,J. 1988, African hunter-gatherer social organization―Is it best understood as a product of encapsulation ？ Ingold, Riches and Woodburn（eds.）*Hunters and gatherers（1）―History, Evolution and Social Change.* Pp.31-64. Berg, Oxford